



“いま”を生きる ×

“これから”を生きぬく力を育む保育

2年次

～多様性を生かし、共生社会を実現する教育の探求～



- ✧ お池、何もいーひんで (3歳)
- ✧ ミミズかわいい! (3歳)
- ✧ やっぱり小さいと飛べへんのやな (4歳)
- ✧ よわってるみたい (4歳)



- ✧ カラスにあげてもいいけど… (5歳)
- ✧ これはぐるぐるリレーやな (5歳)



- ✧ ちょうちょさんのおうち (3歳)
- ✧ ごーめんね (4歳)
- ✧ うれしい気持ち (4歳)
- ✧ 出してあげる? (5歳)

目次



- ✧ トマトって? (3歳)
- ✧ まめ、むいてみよう (3歳)
- ✧ このアリはかむねんで (4歳)
- ✧ カメを見ながら (5歳)
- ✧ 自分で決めるということ (5歳)
- ✧ 入ってほしくないから… (5歳)
- ✧ 2本目の大根収穫 (5歳)



- ✧ このままでもいいんじゃない (4歳)
- ✧ 砂場のプールづくり (4歳)
- ✧ 子供たちのオニごっこ (5歳)



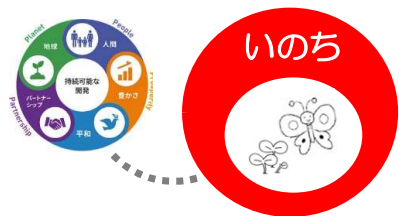


- ◇ お池、何もいーひんで （3歳）
- ◇ ミミズかわいい！ （3歳）
- ◇ やっぱり小さいと飛べへんのやな （4歳）
- ◇ よわってるみたい （4歳）

生き物をみたり・ふれたり
変わっていくのに気づいたり
生きてるなって感じたり
死ってなんだろうって思ったり
自然の不思議に触れたり
なんで？って疑問をもったり

～幼児期の子ども達は虫や小さな生き物に出会い、草花に触れて
遊ぶ中で様々なことを感じたり、考えたりしています。
身近な環境の中にこそ、命があること、循環していることに
気持ちを寄せられるように～

3歳児Ⅰ期 4月



保育エピソード

入園前、生き物が立ち寄ったり、子供たちが興味をもちながらのぞいたりできるよう、トロ船に水をはって園庭に置き小さな池を作りました。その中にはメダカを数匹入れておきました。子供たちは園庭に出ると、早速「これ、何？」とのぞき込みます。教師は「お池だね。何かいるかな？」と声をかけ一緒にのぞき込みます。メダカは水面近くを泳いでいるのですが、子供たちは中々見つけれないようで「いない」と言います。「ここにいたよ」と教師が指さすと、「ほんまや！」とようやく見つけられたようでした。

そのうち、園庭での遊びに慣れ始めた子供たちは、次第に池に砂を入れたりかき混ぜたりして遊ぶことを楽しむようになりました。「メダカさんいたんじゃないかな？」と子供たちに尋ねますが、「知らん」「何もいーひんで」と答えます。探そうにも中は砂や泥で濁っていて何も見えません。私がどう言葉かけるべきか悩んでいる間も、子供たちは次々砂を入れて濁る様子を楽しんでいるのです。

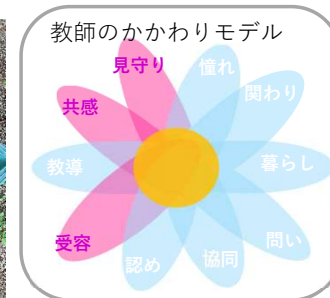
お池、何もいーひんで

環境そのものがもつ面白さを見つけて

考察

教師はメダカがいることを知っていますが子供は知らないで、中々見つけにくかったのかもしれません。加えて、3歳児の発達を捉え直すと、対象の物と他の背景とを分別しにくいという点があるのかもしれません。

また、教師は生き物を大切にしてほしいと思うからこそ言葉かけを行っていましたが、子供たちは生き物がいるということ以前に、“水がある場所”という環境自体の面白さを純粋に楽しんでいるようでした。砂を入れた時の水面の揺れや音、濁り方…等々その全てが子供にとって魅力的なものに映っていたのでしょう。生き物がいる、と実感できるのは、その魅力を十分に堪能した後なのかもしれないと思いました。



未来につながる教師の学び

教師は、初め池に住まう生き物を大切にしたいという思いもあり、どう言葉をかければ砂を入れることをやめてくれるかということを考えていました。しかし、メダカをすぐ見つけれられる大人に対し、子供が中々見つけれなかったように、池に対する見え方、捉え方は大人と子供で違うのかもしれないと気付きました。そうした違いがあるということ自体も楽しみながら、子供の見ている世界を共に見つめ、一緒に考えていくことが大切だと改めて感じました。

3歳児 I 期 4 月



いのち



ミミズかわいい！

保育エピソード

間近で見る初めての生き物との関わりから



教師のかかわりモデル



副園長先生が畑の土を移動させるため、土を一輪車の上にのせています。そこに興味をもって集まってきた子供たち。「なにしてんのー？」と見ているうちに、土の中からまるまると太ったミミズが出てきました。私が「すごい！どんどん潜っていくね」と言い、一緒に見ていると「かわいい～！」と嬉しそうな声が上がります。（かわいい…？）と思う教師達をよそに、「どんどんもぐってる！」「もっかい見たい！」と興味津々の子供たち。ミミズが土に潜るたびに「どこに行った？」と探し、見つけると「もっかい見せて」と口々に言います。私がミミズを土の上に置くと、子供たちは潜っていく様子を嬉しそうに見守り、「かわいいねー！」と言い合っています。人差し指で触り、「きゃっ！」と驚いたような、嬉しいような声をあげる子供もいます。

ミミズが入った土を木の根元へ移動させると、他の子供たちも集まってきました。「せんせー！見て！」と教師を呼びに行ったり、皿の上に取り出したり、切り株に乗せたり…。また、地面に潜っていったミミズを見て、子供が自分でミミズを出したりつまんだりもしていました。そんな中、ミミズにとって土がお家だと思ったのか、数人の子供は遊びが終わりの時間になると、「ミミズさんバイバイ」と、土の上にミミズを置いていました。

保育エピソードその後

次の日から、「ミミズ探ししよう」と、見つけた場所の土を掘り返す子供たち。ミミズを探すということが一つの遊びになっていき、次第に子供たちの生活の一部となりました。

考察

何度地面の上に出されても土の中に潜っていくミミズへの驚き、面白さ、不思議さを、子供たちは自分たちなりの言葉で「かわいい」と表現したのかもしれませんが、勿論、すべての子供たちが初めからそう思っていたかどうかは分かりませんが、教師が平気で触る様子を見て“平気なんだ”と安心し真似をしてみた子供もいたでしょう。そうしていつのまにか子供たちの中で「かわいい」という言葉が広がり、ミミズはかわいい生き物なんだ、という共有が成されたようです。身近に暮らす生き物に気付き、親しみをを感じるきっかけとなりました。

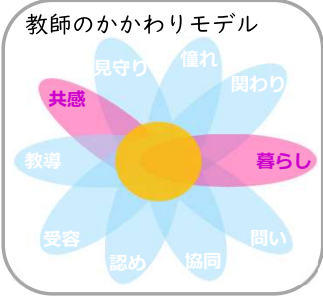
未来につながる教師の学び

いつのまにか惹きつけられてしまう生き物の面白さ、不思議さ。ミミズを囲む子供たちの驚きの表情やわくわくしている様子を見て、教師自身も自然・命への優しい気持ちを忘れずに子供たちと向き合いたいと思える出来事でした。身近に暮らす生き物たちから子供たちが感じた驚きや面白さを教師が肯定的に受け止め、同じ気持ちで向き合うことの大切さを感じました。そうした教師の関わりが、子供が命に思いを寄せるきっかけになるということを、心に留めたいと思います。



やっぱり小さいと飛べへんのやな

生き物の成長を間近に感じる中で、育ちゆく幼児の捉え方



保育エピソード

柑橘系の葉にいた幼虫を飼育していると、子供たちはだんだん大きくなる幼虫のウンチや、飛び出た臭角の匂いに驚く毎日を過ごしました。やがて幼虫は子供たちに見守られながら蛹になり、そして大きなナガサキアゲハになりました。

生まれたメダカがよく観えるよう保育室にはモニタを置いて、この日ばかりはアゲハを映すことにしました。登園した子供たちが「チョウなった!」「でっか!」と興奮気味に話しています。やがてストロー状の口への気付きから飼育ケースの中に食べ物が無いことに気づき、「お花入れる」「逃がす」と話し始めました。するとA児が「自然にしてあげる」と言い、両手を広げ大きな囲いを示しました。A児のアゲハへの思いを受け止めながら、いつしか教師は生まれたアゲハをアゲハらしく飛びたせたいと願うようになりました。そこで「アゲハに決めてもらう」ということで蓋を開けて外に置きました。子供たちが見守る中、アゲハはふわりと舞うと空に飛び立ち、その場の誰も言葉なくその姿を追っていました。随分な沈黙の後アゲハが見えなくなりA児は「やっぱり(飼育ケース)小さいと飛べへんのやな」とぼつりと言いました。この日「アリさんつかまえる」と言っていたA児は、まるで原っぱのように飼育ケースに砂と草を設えると「お家ちゃんとしたげな」と花壇に目を向けているのでした。



考察

A児は以前、共有スペースにあった1m四方のプランターが入るチョウの囲いを見ており、おそらく本人なりの学びと予測の中で広くした方がいいと考えたのではないかと思います。しかし、撫でたり観たりと愛着をもって関わったアゲハが羽ばたいていったのを目の当たりにし、A児は知識として知っていた以上の「生」の感動を味わい、飛び立つ様子を思わず息を呑み観たのではないでしょう。そうした命の感動がA児の生き物への向き合い方を変え、捕まえるということにも変容を及ぼしたと考えられます。

未来につなぐ教師の学び

子供が見たり触れたりするだけでなく、モニタといった映像機器を活用することで、より興味深く観るのだと気付きました。また愛着をもった生き物がそのものらしく生きていくということに触れることも、体験を豊かなものにすると感じました。生き物の死という場面でのいのちについて子供に投げかけがちですが、驚きや発見など連続する「生」にたくさん触れることで子供は心を揺さぶられ、慈しむ思いが自然と育まれていくのではとないかと思いました。

その後のワンシーン

秋になり、A児は他児とバツタ捕りに夢中になりました。他児が同じケースに入れようと言うと、A児は断りました。なぜか理由を尋ねると「一緒にするとAのおっきなったかわからへん」とその成長を楽しみに思う姿が見られました。

4歳児Ⅲ期 | 10月



よわってるみたい

虫捕りを通してみられた子供達の変容

保育エピソード

好きな遊びの時間にA児、B児が虫かごいっぱいバツタを入れて保育室に戻ってきました。「これはぼくが捕まえたんやで」「畑にいたんやで」などとそれぞれに自分が捕まえたバツタを見てはしくて得意げにアピールしあっています。こうして毎日のように虫かごを取り囲んで一緒におしゃべりする時間も楽しみの一つとなっています。するとA児が「このバツタは色が茶色いねん、ちょっと待っててな」と言って図鑑を持ってきました。B児の「図鑑ってないの？」の一言からみんなで絵本室で探してきたものです。図鑑を見るようになってからはバツタそのものに関心を寄せるようになり、名前を調べたり写真と見比べたりしています。一緒にバツタを見ていると、虫かごに張り付くように止まっていた一匹のバツタが痩せているように見えました。私が「おなかぺっちゃんこやな」と思わずつぶやくと、A児が「どれが？」と言いながらそのバツタを探し当てました。「弱ってるみたいやな」と言いながら二人はじっとそのバツタを見つめていました。

お弁当の後、二人が園庭でしゃがんでいます。バツタを逃がしている様子に気づき「逃がしてあげてるの？」と聞くと、A児は「おなかへってはるねん」B児は「お休みになるからな」と話をしながら草の中に消えていくバツタに向かって手を振っていました。



考察

A児とB児は、虫かごの中を整えて置いておくという選択もありながら、逃がすという判断をしました。“痩せているから弱っているのかな”と思いを巡らせたり“休みになるから放っておけない”と見通しをもって考えたりする姿は、バツタの日常と自分たちの日常とを重ね合わせているようです。

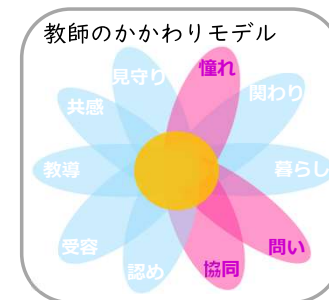
バツタつかみをして触れていく中で、バツタそのものをよく見たり、もっと知りたいと思ったりして愛着を深め“生きているものどうし”という感覚を広げ、大切に扱おうとする気持ちが育まれていったのではないかと考えます。

未来につながる教師の学び

私自身生き物が好きということもありますが、子供たちが生き物に関わる姿を見守ったり受けとめたりするのは大切にしていることの一つです。

教師のつぶやきが物言わぬバツタの声を代弁したようですが、それは生き物を目の前にして出た素直な言葉で、そのことが子供達への問いにつながったようでした。

子供達と横並びの位置で、言葉を発したり新鮮な驚きや感動と一緒に味わうことが、子供達と共に学んでいることになり、多様な生との関係を広げていくきっかけにもつながっていくのではないかと考えています。





- ☆ カラスにあげてもいいけど… (5歳)
- ☆ これはぐるぐるリレーやな (5歳)

遊びを自分ですすめたり

もっと楽しくしようしたり

いろいろなものに興味をもったり

知りたいことを調べたり

社会の出来事に目を向けたり

～幼児期の子ども達は生活の中におこる出来事に、どうしたら
よいかを「考え」、そして「工夫」という形で表出をしています。

身近な環境に関わる中で、起こっていることを多様な視点から

自分事として捉える…、そんな姿につながるように～

5歳児Ⅱ月6月



カラスにあげてもいいけど…

保育エピソード

栽培活動を通して



キュウリが突かれ落ちていたことがありました。齧った跡からカラスが食べたのでは？ということになり、子供たちと相談し鳥よけを作ったり、ネットで覆ったりする等、カラスに食べられないようにしました。すると、カラスは個人栽培をしているピーマンを齧ったり落としたりするようになりました。副園長先生からカラスが子育てをしているという話を聞いたので、落ちたピーマンを見ている子供たちに話しました。すると「カラスの子供に食べさせるのかな？」「お母さんおっぱいあげるしか…」食べられても仕方がない…そんな雰囲気友達と話していました。この日、収穫したキュウリの一つが痛んでおり、自分たちは食べられないから、カラスにあげると畑の前に置いていました。翌日、キュウリが散らばっているのを見た子供たちは「カラスが食べたよね」と興味深く見た後、「小さな虫が食べるよね」とコンポストに入れに行きました。キュウリは食べられなくなりましたが、その後もカラスはピーマンを突いて落としていきます。A児が私に「ピーマンが落とされた」「穴があいた」と言いに来ました。A児は少し怒った感じで「カラスにあげてもいいけど、落とすだけやしもったいない」と言ったので、私も「そうだよね」と声をかけると、落ちたピーマンは潔く「コンポストの虫にあげる」と、B児と一緒に入れに行きました。ピーマンの支柱にキラキラテープをつけ、カラス対策をする子供もいたのですが、カラスがピーマンの茎を折ったこともあり、教師からピーマン苗をカラスの巣から見えにくい場所への移動をしようと提案しました。数日経ち、カラスがピーマンを落とさなくなったと思っていたら、キュウリ畑の前にピーマンが一つ落ちていました。私は、近くにいた子供に「また、カラスが落としたのかな？」と聞くとC児が「カラスのために置いた」と話してくれました。

考察

カラスがいたことで、自分たちが収穫するために鳥よけを作るなど必要なことを考えたり、カラスの生活を知ったからこそ、自分たちが食べられないキュウリをあげたりするなど、互いにとって丁度いいと思えることをしていました。また、コンポストにいる虫の役割も栽培活動や大学の先生から教えてもらった経験から知っており、カラスに食べられた野菜も“捨てる”ではなくコンポストに入れることを選んでいるようです。子供たちが栽培活動を通して見せてくれる姿はカラスと共生しながら生きるということを体現しているようです。

未来につながる教師の学び

キュウリやピーマンを収穫することだけを考えるのならば、教師がちょうどいいタイミングで、キュウリ苗の囲いを作ったりカラスよけを準備したりすることもできたのですが、様々な状況に出会った時に、どうするのか子供自身が考えることを大事にしたいと思いました。カラスの生態を思うと付き合い方を考えないといけないこともあるのですが、カラスの立場になって考え、思いを寄せ行動する子供たちの姿を肯定的に受け止めていきたいと思います。



これはぐるぐるリレーやな

保育エピソード

運動会の翌日、好きな遊びの時間にリレーをしようと6人の子供たちが集まっていました。私も仲間に入り何度かレースをしていると、A児（年中児）が「先生入れて」と声をかけてきました。私は「お兄ちゃんとお姉ちゃんとリレーをしてるんだ」と応えると、年長の子供たちが「ここに並び」と言いながら、自分たちのリレーのやり方を、A児に伝えすぐに再開しました。A児が走っている姿を見て年中児たちが「いれて、いれて」と集まり、バトンをもらおうとスタートラインに並びだしました。B児はリレーのやり方を伝えようと、年中児のそばに行き、大きい声で話すのですが伝わりません。嬉しそうにバトンを持ち、走っている年中児の姿を見ると、子供たちは止めることも出来ない様子でした。とにかく2チームに分かれて並ぶようにと声をかけていました。私は、年長児の子供たちに向かって「みんなのやりたいリレーとちょっと違うみたいやね」と話すと「うんうん…」と大きく子供たちが頷きました。すると、B児が「みんなバトンを持って走りたいたんや!」と大きな声で言うと、C児が「これはぐるぐるリレーやな」と話しました。D児も「走るだけでいいんや」と続けて話し、私も「楽しそうやな～」と言うと、A児が「ぐるぐるリレーにしよう」と、年長の子供たちはリレーの順番に並び始めました。そして、年中児に「次、白い線のところに行きや」と指をさしてバトンをもらうように知らせたり「前に進むんやで」と声をかけたりする等、自分が気付いたことを伝えながら、ぐるぐるリレーを走っていました。年中児が片づけになりいなくなると役割を決め自分たちのリレーを始めていました。

考察

嬉しそうにバトンを持って走る年中児の姿に、少し前の自分たちの姿を重ねて見ているようでした。そのため、私が言った「みんなのやりたいリレーとちょっと違うみたい」と、話したことに共感し、年中児の心情に更に寄り添ったようにも感じとれました。子供たちも自分たちのリレーのやり方（競う）を押し通すでもなく、やめてしまうでもなく、その場に居合わせた年中児の気持ちや状況に合わせて、今できるやり方で一緒にリレーをしようという思いになったようです。年中児がいなくなると、自分たちで役割を決め遊び始めており、これからどうするのか友達と対話しながらリレーを進めていくことも含めて、子供たちの遊びになっているようです。

年中児の思いを感じて…



未来につながる教師の学び

リレーを通して子供たちの姿を振り返ると友達や自分のことを見つめる過程であるということを改めて実感します。どんなリレーがしたいのか、面白さをどこに感じるのか等、一人一人様々ですが、年長組みんなでする活動だからこそ子供の興味や状況を捉え、教師も子供たちと横並びの関係で対話していくことを大切にしてきました。子供たちも“自分たちのリレー”をどうするのか決めながら、自分の気持ちや友達の思い（内面）と向き合い考えを深めていくのだと思います。子供同士が関わり合い対話へと向かうような教師の働きかけの大切さを振り返りました。



- ◇ ちょうちょさんのおうち (3歳)
- ◇ ごーめんね (4歳)
- ◇ うれしい気持ち (4歳)
- ◇ 出してあげる? (5歳)

気持ちをよせたり

優しくしたり 愛しんだり

自分にできることを探したり

誰かのために動いたり

時には怒りや悲しさを感じたり

～幼児期の子ども達は身の回り自然や環境にも、家族のように

親しみをもち、大切にやさしく関わろうとしています。

環境にやさしいモノを選ぶ、使うといったことだけでなく、そのものの

在りように目を向け自分の思いや考えを表せることを大切に～

3歳児Ⅱ期 | 0月



だいじ



ちょうちょさんのおうち

保育エピソード

A児とB児が園庭で低く飛んでいるチョウを見つけ追いかけています。羽が破れていることに気づいた教師がそのことを伝え、「ほんまや」と見る2人。追いかけるうちに踏んでしまいそうになったので、A児が「これは？」とバケツを持ってきました。B児はその中にチョウを入れ、「ごはんたべてー」と持っていたアサガオを入れます。「どうしょっか」と尋ねると、A児が「ちょうちょさんおうちは？」と呟きました。「おうちってどこ？」と聞く教師に「お花いっぱいのところだよ」とA児。「じゃあお花のおうち探しにいかうか？」と言うと、B児は「でもここお花いっぱいじゃない…」と手放したくない様子でした。途中、バケツを持ちたがった他の幼児にも「だめ、Bちゃんがみつけたの」と囲っていました。

A児はずっと「ちょうちょさんのおうち、ここかなあ」と花壇を指さし話しますが、B児は「全然いっぱいじゃない」と嫌がります。「じゃあ、もっとお花がいっぱいのところを探しに行く？」と聞き、頷いた2人をつれて年中・年長児の花壇に向かいました。A児は「ここいいんじゃない」と言い、B児は「ううん…」ともどかしそうにチョウを見つめています。するとA児が「ちょうちょさん、おともだちいるんじゃない」と言います。「ほんとだね。いるかもしれないね」と話していると、突然、B児はチョウをバケツから出し、花の上に乗せました。チョウはすぐに蜜を飲み始めるようにし、その様子を2人はじっと見ていました。B児は「ちょうちょさん、これもたべて」とバケツに残っていた花をふりかけ、「ばいばーい」と笑って手を振ります。2人と一緒にしばらくチョウを眺めた後、「いこっ」と3歳児の園庭へと戻っていききました。

それぞれが思うだいじの仕方



考察

羽の破れたチョウを見た時、お家に帰してあげたいと思ったA児。一方、B児はアサガオをあげていたように、逃がすのではなく自分の手で世話をしたいと思っていたのかもしれません。そのどちらの気持ちも、方法が違うだけで、だいじにしたいという思いは同じだと感じました。

教師に自分なりのしたいことを伝えていた2人でしたが、それぞれの思いは教師を介しながら、お互いにも伝わっていったようでした。2人は友達の思いを間接的に知っていき、その過程でB児は徐々にA児のだいじの仕方を受け入れていったのではないかと思います。

未来につながる教師の学び

どちらの思いも受け入れたい、けれど、どう返せばいいのだろうか悩み、2人が教師に向けて話しかける言葉を一度受け止め、同じ言葉を返しながら共感していききました。振り返ると、その応答が2人にとって自分の思いを聞いてもらえたという満足感に繋がっていたのかもしれないと考えました。

教師の言葉や仕草は、子供に様々な影響を与えています。子供が表出するもの（表情・行動）を見取った上で、その内側に込められた願いが何なのか、教師がどう応えるのかを考え続けていきたいと思いました。

教師のかかわりモデル





ごーめんね

自分たちで植え、世話をし、いただいた中で芽生えた思い

保育エピソード

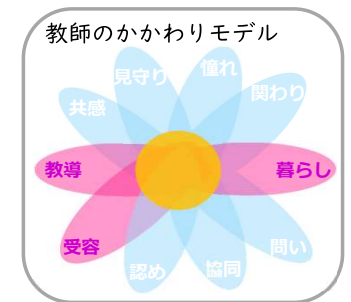


考察

1学期に子供たちと植えたピーマンは大きさや量など子供たちを大いに驚かせました。しかし9月になるとあまり大きくなりず、赤くなる物も増えてきました。そこで教師からピーマンがそろそろ終わりであることを伝え、みんなで抜いて全部を分けようと話しました。

子供たちの生活の中には遊びで使った花柄等を入れる箱があります。遊びの中で土にかえすためのものだということを伝えてはいますが、まだ知らない子供もいます。そこで教師はピーマンの終結に際し葉だけを箱に集め、また土にかえそうと話しました。子供たちは教師の話を聞くと苗木に向かい、数枚採っては急いで箱に駆けたり、両手いっぱい集めようとしたり、1枚1枚丁寧に葉だけをちぎろうとしたりとそれぞれに集めていました。教師も子供たちに交わりながら「いっぱい食べさせてもらったね」と葉を集めていると、A児が突然「ピーマンさん、ごーめんね」と言いました。教師はその意味が知りたくて尋ねると「だって、ごーめんねだもん」と言うだけでした。すると、それを聞いていたB児が「ちがう、ありがとうだよ」と少し強く言います。どうしてか尋ねると、B児は「いっぱい作ってくれたからありがとうなんだよ」と応えたのでした。

生活の中で自然物の始末について知らせるつもりでピーマンの葉集めを提案しました。子供はすんなりと受け入れ競う感覚で運んだり、集め方に自分なりの楽しみを見つけたりしていました。しかし、一緒にする中でふともれた教師の言葉が、A児の生活の中にあつたピーマンへの思いを呼び起こすことになりました。A児にとっては実だけでなく苗木そのものがピーマンで、青々とした葉を取るということは親しみをもった大事なものを傷つけるような感覚だったのかもしれません。B児もA児同様ピーマンを大切に思う気持ちを抱いていますが、終わりというものを認識しているのだと感じました。



未来につながる教師の学び

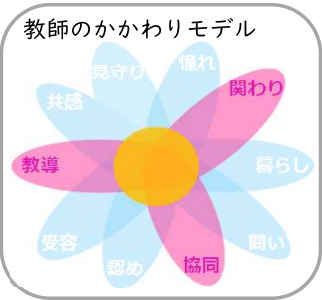
1学期に喜んで十分収穫したピーマン。夏休み中の始末も考えましたが、4歳児なりに終結を感じられたらと2学期に残しました。栽培活動は収穫することの喜びや生長の変化を楽しむなど様々なねらいがあります。その中で教師は大切に育てたい思いから「ピーマンさん」等、まるで人のように例え関わるがあります。

苗木を引くことも葉と茎を分けることも4歳児にとっては大きくは遊びの一環でしたが、時間をかけ思いをもった栽培物の終わりに際し配慮が必要な場合もあると感じました。一方で幼児との生活の中で栽培物を始末したことが様々な思いを引き出し、生活の中で植え、世話をし、収穫した栽培物をどう終結するかを、子供たちとの中で考えていくこともこれからにつながると感じました。



うれしい気持ち

人によろこんでもらえることが、こんなにうれしいことなんだと感じたお店屋さんの話



保育エピソード

収穫したお芋を持ち帰りましたが、園全体で集めると少し残りました。誰かに譲ることで喜びがまた繋がるような経験になればと、相談として子供たちに話しました。

子供たちはまだお芋があることに喜び、でも全員分がないとわかると、多くは自分が持って帰ると言いました。教師は誰かが我慢して悲しい思いをするのは嫌だと話し、近々中学校でバザーという「ほんまもんのお店を作って、いろいろな人にどうぞってして喜んでもらうこと」があるとスライドを見せ話しました。子供たちは自分たちが持ち帰り食べた喜びから「ぜったい欲しいってなる」「うれしい気持ちになる」と言いました。そして「お芋を入れる袋あったほうがいい」「でも何も描いてへんとさみしい」という思いから、袋に絵を描くことになりました。自分が持って帰りたいと呟いていたA児も、しばらくすると他児と「Aはお魚かく」と描いていました。

バザーへの参加はできませんでしたが、後にたくさんの方がお芋を手にする様子を写真で見ると、子供たちは「えー！」と驚きと喜びの表情を見せました。空になったカゴの写真を見たA児が「いえーい！全部売れた！」と言うと歓声があがりました。購入者の「とってもかわいい袋ステキです。大切に食べるね」というメッセージに、A児は立ち上がりガッツポーズをしていました。

保育エピソード・その後

相談しバザーの収益でマメの種を買いました。後日ポットに芽出したソラマメを畑に植えました。教師が「いっぱいできるで」と声をかけると、A児は「これ、いーっぱい？」と畑を見ながら両手を広げ、「今度は先生も持って帰れるで」とうれしそうに言い、私もつられ笑い合うのでした。



考察

A児は自分が持って帰りたい思いをもっていました。バザーに向け友達と袋づくりをしていく中で、僕たちのお芋売れるかもという期待に変わっていったのかもしれませんが。用意したお芋が完売したり、自分たちのしたことにうれしい言葉を寄せてもらったりしたことが、A児にとって「自分のしたこと誰かが喜んでくれるということは、自分がしたいことをする以上に嬉しい」と実感できる経験となりました。その経験が「先生も持って帰れるで」という言葉につながったと思われます。

未来につながる教師の学び

バザーというものは、子供たちにとっておそらく初めての出来事でした。日頃出会うクラス・学年といった顔を知っている保護者ではなく、幼稚園という枠組みを超えた自分たちの知らない人たちに喜んでもらったことが、子供たちにとっても大きな喜びや自分に価値を感じる経験にもなりました。これからも多様な人と出会い、関わり合える場を大切にしていきたいと思いました。そのためには先入観にとらわれず、これまでと違う発想を探っていける教師でありたいと思いました。

5歳児I期4月



出してあげる？

保育エピソード

「虫がいる」と、A児が呼びにきました。追い払ってほしいのかなと思いながら付いて行くと、たらいの水の中に虫が浮いているのを指さしています。虫の様子をじっと見ていて、特に何も言わないA児。私は、ハナムグリかな？と思いましたが、「（この虫）何しているのかな？」と聞くと、「うーん…泳いでいる？」と、答えます。よく見ると、足をバタバタさせ、確かに泳いでいるように見えますが、溺れかけているようにも見えます。私が「どこからきたのかな？」と聞くと、A児は周りを見回し、「うーん…あっ、」と首からかけていた図鑑を開き、『こあおはなむぐり』と載っているページを見つけました。目の前の虫の特徴をよく捉えているなあと感心し、「あったね、よく見つけたね」と応え、私も一緒にハナムグリを見ていました。

少しして、私が「ハナムグリって、お花が好きなんじゃないかな？」と言うと、A児は「出してあげる？」と応えました。でも、私が「自分で跳んでいくのかな？」と言い、そのまま2人でハナムグリの様子を見ていました。

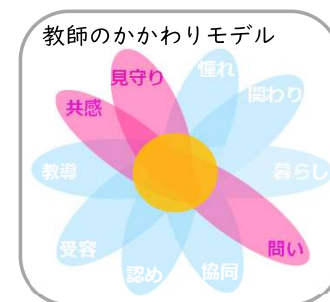
水面に浮かぶ虫を見つけて



考察

どんな思いで私を呼びに来たのか、A児について思いを巡らせ、理解につなげていきたい出来事でした。ハナムグリという偶然見つけた虫に対して、思い入れがあったわけでも、私に何かをしてほしいと思っていたのでもなく、虫がいるということを教師に知らせ、見ているうちに知りたいという思いになっていたのではと推察します。

教師とのかかわりを通して、安心して自分の思いを出し、思考する楽しさを感じているA児の一面に触れることができたように思います。



未来につなぐ教師の働きかけ

A児という個の理解を深めていく際に、幼児の行動に視点を向けがちですが、その幼児の心情に教師が気持ちを寄せ、言動の意味を捉えていくことが必要ではないかと改めて感じました。

事象に対する教師の言葉がけや関心の向け方が、幼児の思考することにつながることを期待し、幼児と共に感性を磨いていける存在でありたいと思います。